

小説

幻 風 景

稲瀬 隆

いつごろからだろう。目に映る奇妙なナニカが気になるようになったのは。

雪灯籠

令和六年一月二日午前一時半。NHKのテレビ画面は珠洲市役場前の固定カメラが、降り積もる雪の中で不安に息を潜める町を映している。例年なら今時分、まだいくつかの家々からは雪面に橙色の灯火を投げたかもしれない。だが今年はそのわずか十時間ほど前、年明け早々の夕間暮れに、最大震度七、M（マグニチュード）七・六の強震が能登半島を襲っていた。断片的な情報で各所の大きな被害が推測されつつも、正確な発災状況はつかぬまま、更な

る地震発生への警報も発出されていた。

平地に広がる町並みは一見、津波や土砂災害の虞は無さそうながらも今、大きな不安を抱えつつ息をつめて眠っている。整然と並ぶ切妻屋根の家々は雪に覆われ、いくつかに控えめな街灯の微かな光がうつすら家々を照らして路面に薄墨の影を落とし、遠くの信号機だけが微かな萌黄色を点滅させて時間の流れを伝えつつモノクロームの静謐に抗っている。家々は厚い雪を屋根が受け止め、黒く浮き出た小屋梁と小屋束とが白い真壁造りの構えを支えて、寡黙に、そして誠実に凜として建っていた。車は軒先で白い小山を成し、道路を通る何物もなく、ほとんど色彩を失った景色の中で動くものはなにもない。

何も動かない、動くはずのない白黒の世界。だが、時折、何かが動いているのに気付いた。大きさが人ほどのいくつかのあいまいな光の塊だ。雪片ならば大抵は上から下に動く。吹き上げられたものならば幾多も同時に舞うだろう。だが、このいくつかの光たちは個々がばらばら、異なる方向に動いている。戸口から戸口へ、戸口から窓辺へ、またそこから路地奥の家々へ、まるで舞うように町内を移動する。およそ人の動く速さではない。くるくると、またひらりと、コマ落とし映像のように素早く移動し、ふと窓辺に停まったかと思うと別屋の戸口に向かう。まるで何かを配達しつつ中の様子を伺っているかのようだ。

これは目の錯覚だ。さもなくばなにかの映像ノイズだ。高感度カメラが、あまりに白い画面の中で家々の影を捉え損ねたゆらぎなのか。重なり合うカメラレンズがそこになり光を作り出した幻影なのか。だがそれは固定カメラの静止画面でこれほど動き回るものなのか。それとも、もしやその動きまわる光体は、本当の・・・

酔眼に映る不可解な光景を訝りつつ眺めるうちに、次第に視界はぼやけ、半ば無意識のうちにベッドにもぐりこんだ。妻はとつと寝入っている。

翌朝点けたテレビにはもうその映像はなく、報道の焦点

は被害状況の報告に移って、深夜の町並み映像の放送もなくなった。妻はコーヒーを淹れている。昨夜遅くの被災地映像は見なかったようだ。独立した息子、娘の部屋は今、それぞれがテレビを入れた夫婦各自の部屋だ。

「正月早々に地震なんて、とんでもない年明けだよなあ。今年は波乱の年かな・・・」麻生はエールが半分ほどになったパイントグラスを置いて呟いた。「オレ、余震が心配で夜中じゅうテレビ見てた・・・」

松の内終盤の居酒屋は空いていて、出席者が数えるばかりの同窓新年会には打ってつけだった。

言おうか言うまいか逡巡しながらも、呟いてみた。

「・・・夜中の現地映像、なんか変な感じしなかったか？」

「なにがだよ。」早々に真つ赤な狸々顔の飯岡が聞いてきた。

「夜中の珠洲市の情景だよ。一面雪の画面で、なにか動いていなかったか？」

「オレはすぐ寝た」麻生が言うと、飯岡は「なにが動いた？」と問いかけながら「おれもちよっとは見たけどさ、車なんか通ってないし、歩く人なんかもない。なんにも変化ないから飽きてすぐ寝た」と。

「その屋並みの間で、なにか動いてた・・・気がするんだ」自信なくそう答えた時、テーブルの向かい席にいた植田が、隣席との会話を止めて、割り込んだ。「ボワツとした光だろ。雪にしちや動きが変だった・・・」

「あは、そりや幽霊だろ！ゴースト！高感度カメラがちらつく雪を拾った光の“幽霊（ゴースト）”！ ってな」麻生が嗤った。

「なるほど、そんなこともあるか」と納得する飯岡に対して植田は、納得しかねる風で

「そんな単純なものじゃない気がするなあ・・・」とつぶやいた。

結局、私の目撃譚に同調してくれたのは植田だけだった。その彼は翌週、突如他界した。交通事故だった。

書齋

「そんなに気になるなら病院行ったら？」

私の繰り返す言に半ばうんざりした口調で妻が、コーヒーを淹れる背中越しにそう言った。それが眼科受診の踏ん切りとなった。

この二、三年とみに身体の各所に不調を覚えるようになっていた。とりわけ目と頭の働きはかなり不安だ。テレ

ビでタレントの名前が出てこない、メガネ、スマホの置忘れ、納戸で、洗面所で、「なに取りに来たんだっけ？」などは以前からあった。だが、問題は近時記憶。つまり今方見聞きしたこと、つい先ほど行った行動を忘れることが多くなったことだ。数分前に自分で口に出した地名や人名が、出てこない。先刻片づけたものが、全く覚えのないところから出てくる。重要な約束、会合等のまるごとの失念も増えたように思えた。これは軽度認知症の兆候だ。それに加えて今般の正月夜中の不可思議な幻影。目は、頭は、大丈夫かすこぶる心配になった。

老眼は確実に進んでいる。水晶体から網膜まで濁りや歪みが生じているのだろう、とは思う。従来から強度の近視で硝子体に濁りがあり、目を閉じて太陽に向かうと、糸状の濁りが回虫のように身を振らせた。だが最近の目の異常はそれとは違う何か。いつ頃か、時折目の隅に動いて見えるようになった「異物」だ。

「まただ！やだわあ〜」

妻を悩ます小虫たち。ゴキブリの子、クモ、シヨウジョウバエ、そして鉛筆の先でトンと白紙を突いたほどの小さな黒点。ノミバエ。これらは『実像』だから対処できる。

だがある時、私にだけ見え、妻には見えないものがあるこ

とを知った。ものの輪郭が判然としない薄暗がりの中、いや湯気が立っている鍋のふたを開けた時でも、はつきり黒い点がつん、と現れ、すうっと移動し消えてゆくのだ。目の異常を疑った。だが、眼球の移動とも符合しない。とすると網膜か、もつと先の脳レベルの問題なのか。

「水晶体に少し濁りがあります。」と若い女性医師がだるそうに言った。診療時間の終了が迫っていた。スリット光で眼球を診る細隙灯の扱いも多少乱暴だ。葉でこじ開けられた瞳を抜けて強い光線がよぎり、まぶしさに思わず目を閉じようとすると何度も『我慢して！』と命じられる。およそほとんどの検診は、健康をカタに獲られた拷問なのだ。「眼内レンズを入れれば見え辛さはなくなります、混濁はまだ小さい方です。どうしますか」

術後二、三か月も続く点眼薬などケアが面倒で、白内障手術は先延ばしにした。水晶体以外、眼の異常は指摘されなかった。とすれば、視界をよぎるあの不愉快な影はなんなのか。目が原因でないとする問題は『脳』なのか？憂いはさらに大きくなった。

そういえば数年前から、ベッドに入り目を閉じると、まだ寝入っていない脳裏に、いや暗闇に目を開いてさえ眼前に、鍵穴から覗きこんだような洒落た書齋の風景が見える

ようになった。本棚には革張りの洋書が並び、タイプライターには半分せり上がった洋紙がセットされている。映画のシーンか、以前訪れたいずれかの歴史館での記憶なのか、定かではない。目を凝らすと、欧州言語と思しき打ちかけの文章がある。だが目を凝らして文面を読もうとすると、文字は溶けて流れ、消えてゆく。

夢か、と何度も疑ったが、その間にスマホの充電チェックもできたりする。明らかに『覚醒』しているように思えるのだ。幻視だとすれば、ある種の認知症が心配になる。

「夢の類ですね」

四十代半ばと思しき担当医師は、PCモニターを見つめたまま、即答した。

「目を開ける時のでも、ですか？」

「目をあけている、というのはご自身の認識、自覚の問題ですから。自分は寝ていないと思っても傍から見れば熟睡していることはよくあることです。」

たしかにフツと気が跳んだほどの一瞬のことでも「いびき掻いてたよ」と指摘された経験はある。

「妙な景色なんです。ほぼ毎回、同じ部屋の風景です。

なにかのトラウマでしょうか」と半笑いで言うと、医師はこちらを向き直った。

「夢は一日働いた脳の後片付けで、遊びでもあるんです。深い意味はありません」

そこで聞きかじりの知識で「レビー小体型の認知症では、見えたものの非現実的な誤認や幻視の症状が出現すると聞いたのですが。」と問うと

「起きていて見る『夢』は幻視、幻覚ですが、これまでお話しした限りでは必ずベッドの中なので違うと思いますよ。」

先ほど行った認知症スケールのスコアも特に悪くなく、年相応だという。

「そもそもレビー小体型の認知症は、旧来の認知症スケールではなかなか見つけにくい」のだとも言った。「ご希望なら精密検査のご紹介もできますが、脳の映像などで直接判定する方法がないので、心機能への影響で判定するんですよ。ですからかなり進行しないと判定できません。」少し上体を反らして椅子の背に預け、両手を組んで続けた。「それにまだ効果的な治療法もないんです。治療薬はまだ治験レベルですから、基本的にはパーキンソン病に準じた対症療法だけです。まあ確定診断には脳神経を取り出して異常蛋白の小体をみるしかない、ということで、適用はないですね」

苦笑いを返すしかなかった。いくら何でも治療でもない白な部屋はTVスタジオのように明るく、背の低い冷蔵庫大の医療機器がいくつかのモニターとともに並ぶ。天井からは巨大なシャワーヘッドのようにLEDが埋め込まれた无影灯がUFOのように宙に留まっている。ブルーの術衣のスタッフが五、六名、待ち構えていた。ストレッチャーを押してきたナースが保温シートを掛けてくれる。

若い女性医師。マスクの上に並んだすっきり形の良い両眼が語り掛けてきた。

「お名前は？」「ではこれより〇〇の摘出手術をおこないます」「麻酔をかけてゆきますね。だんだん眠くなりますよ。ゆつくり一から数を数えてください。はい1・2・3・4・5」なぜか胸元のネームプレートを懸命に読もうとした。そのまま身を委ねる方が楽なことは分かっているが、自分から意識を奪おうとする何ものかと闘っていた。身近な者たちも多くがこうした意識の喪失を経験したのだろうか。知覚が溶けてゆく中で、突拍子もない過去の情景が浮かんできた。遠い昔、米国でスーパージョーのレジが混んでいた時だった。その列がくずれて一人の老人が叫んだ。

“It's my turn!” 『オレの番だ!』

とりとめのない夢想も保温シートの生暖かさも、あらゆる知覚、すべての世界がすーっと消えていく。口に含ん

検査ぐらいで開頭オベは御免こうむりたい。

オベ室

初めての手術体験はもうだいぶ前のことだ。甲状腺の半摘出手術だった。

ストレッチャーに乗せられ、オベ室が並ぶエリアで待機させられた。名前を呼ばれて前の患者が手術室に入ってゆく。『次は自分の番だ』そんな覚悟が迫られる。ふと脈絡もなく四十年も昔の情景が蘇った。結婚披露宴の扉の前だった。

事前に『やめてくれと』と念を押したはずの、結婚行進曲が会場に流れた。ヒロインが絶望で死ぬ歌劇の曲だ。無頓着なブラックタイを気取った式場係が重そうな扉を押し開く。その左右扉の間から大きな拍手が聞こえ、ライトが射し、思わず結ばれたばかりの妻を振り向いた。

『いよいよ自分の番!』

そんな大きな覚悟を感じたのはその時、人生で初めてだったように思う。それまで何組かの式を手伝ってはいたものの、自分にはなかなか機会がなかったからだ。

扉が開いてカラカラと押し入れられたオベ室は寒かった。精密医療機器を守るために室温が抑えられているのだ。真

だ淡雪のように、跡形もなく。

その昔、長寿テレビ番組『丁子の部屋』で、当時の人気男優FSが致命的な病から生還した体験を語っていた。しばしば語られる臨死体験では、お花畑で小川の向こうに、亡くなった人たちがいる。だが、

「そんなのありませんよ。ストンと幕が下りたっていうか、いきなりテレビの電源切られちゃったみたい。パシヤッ! それで終わり。きつと死ぬ時もそうなんですよ。」

脳梗塞や急性心不全から『生還』した友人たちは、倒れた刹那から目覚めるまでのことは何も覚えていない、と言っていた。だが以前、まったく別の体験談も聞いた。かつて一緒に仕事をした優秀な男だ。出張帰りで交通事故に遭い、瀕死の状態となった。家族が直視できないほどの苦悶のさ中、彼自身は大空の下、大草原で気持ちよく寝転んでいた、という。

術後の翌朝、導尿カテーテルの留置不良による不快な鈍痛が目覚めた。これが『現世』の実感だった。覚えた筈の眉目秀麗な麻酔医の名も、すっかり忘れていた。それもこれも、もう二十年以上前の記憶だ。

臨終

植田の納骨式が四十九日にあった。その帰途、麻生、飯岡と居酒屋に寄った。

「あつけなく逝つちまつたなあ」麻生が言った。「まだやりたいことはいろいろあつたらうに」

「まあ俺たちくらいになればそろそろ、いつあの世に呼ばれてもいいって歳まわりなんか・」そう呟くと、飯岡が突然

「お前らさ、死神に会ったことあるか？」と妙なことを言い始めた。

「そんなのあるわけないだろ。お前あるのか？」思わずそう聞いた。

「ある・・・たぶん」しばし沈黙の後、飯岡が話し始めた。

彼が高校生の頃、父親が肝臓がんの疑い濃厚で術前検査のために入院したという。自分が大学の、妹が高校の受験を間近に控えていた時だった、と。飯岡は毎夜、心配と不安で眠れず、ベッドで悶々としていた。するとある夜、突然、見上げた窓辺の天井と壁の合間から、半裸で背骨の曲がった小男が下りて来て言った。『お前のおやじを迎えに来た』と。これが死神だ、そう直感した彼は叫んだ。

『オレの余命の半分を親父に渡すから、今は勘弁してく

取ったという。植田は逆走車との事故の後、搬送された病院で息を引き取ったという。「事故現場で既に意識はなかったらしい。」ぼつりと飯岡がつぶやいた。

彼はその刹那、何を見て、何を思ったのだろうか。「都知事だった作家の最後の言葉、知ってるか？」麻生が言った。なくなる数日前、息子たちに吐いた言葉だという。『死ぬって、詰まんねえよなあ。もうなあんにもできなくなるんだぜ』

彼らしい達観の極みだ、と三人うなずいた。

その夜、酔いのせいで寝入りが早く、深かった。

だが夜半、また息苦しくなった。必死にもがいて目を見開き、暗闇を見た。すると、ここ久しく見ることのなかったあの「書齋」が現れた。相変わらずタイプライターには

れ！！』男は言った『それで？』。飯岡は言ったという『十年間、好きなタバコとコーヒを止める』

麻生が言った。「そういえばお前、タバコを突然止めたな。コーヒも長いこと、呑まなかった！」

「それで親父さんはいくつで亡くなったの？」と思わず聞いた。

「それがさ、九十歳まで生きてくれたんだ」

麻生が噴き出した。「余命を半々にしたら、お前も同時に死んでるはずじゃねえか？」

「そう。だからあれは夢だったのかもしれない、とは思うけど。」

「思うけど？」

「妙にリアルだったんだ。で、もしどこかでまた彼に会えたら、ちゃんと礼を言わなきゃ、って思うよ」

人はいやでも必ず一度は死ぬ。死の定義が変遷し、『生還』できるポイントはより遠くなつて『臨死体験』を語る人も、著述もあるが、それは『死』ではない。『死後』の世界を語れる『生者』はいないのだ。

これまで両親をはじめ、何人の友人、知人、親類縁者を見送ってきたことか。三十年ほど前に亡くなった上司は若い頃、死に対する恐れから、当時言うところの『ノイロー

打ち込み中の洋紙がセットされている。どうせのこと、また溶けてゆく文字列だろうと思いつつ、今夜こそ見定めようとする。体は動かないのに視覚だけが対象をズームアップした。

やはり英文のようだ。だが不思議なことに、いや今更不思議もないが、今夜に限って文字が溶けゆく気配がない。読める。今夜は読める。そして、その文字列は、

It's your turn!

すべての景色がゆっくり溶けて行った。

完